〈追悼文〉

野村先生の思い出

あいクリニック神田
鬼頭　諭

野村先生のご命日が1月25日、間もなく1年が経とうとしています。当あいクリニック神田とは特別深いご縁を頂き、当院開院2年目の2004年から非常勤医師として関わって下さいました。従いまして野村先生の当院でのご勤務歴はあいクリニック神田の歴史とほぼ重なることになります。周知の通り先生は心理臨床にことのほか深い理解と造詣をお持ちでしたから、当院のカウンセラーの指導のみならず個々のケースでの精神療法的なアプローチには特別深いものがありました。先生逝去の報に接した担当患者皆さんから「野村先生は全部分かってくれている素晴らしい先生だった」と異口同音に聞かれた言葉がその証左だったと思います。私自身で言えば、野村先生は頼れる先輩医師というだけでなく10年来の“音楽仲間”でもありました。先生から「一緒に聞きに行こうよ」とさる世界的に有名なピアニストの演奏会にお誘いがあったことが始まりでした。以来数多くの演奏会にご一緒する機会に恵まれ、そのなかで先生が10代の頃からクラシック音楽に親しんでこられていたこと、ウィーンに何度も足を運ぶほどのクラシック通であることを知りました。ですから先生が亡くなられたことは私にとっては特別な友人を失ったことでもあったのです。先生とは年末大晦日、東京文化会館のベートーヴェン弦楽四重奏曲演奏会に行くことが毎年恒例のようになってもいました。今年はどうしようか大変迷いましたが、追悼の思い已まず、会場に足を運びました。もちろん先生はもうおられないのですが、「今日もクリニックで仕事してたの？」とほほ笑む先生の温顔とあの少しハスキーな声を思い浮かべながら、一緒にいるつもりになって聴いていました。語りだせば尽きせぬ思い出が湧き上がってきます。その思いを胸に、この拙い追悼文を閉じたいと思います。合掌